

山姥吉
兵衛話

一、大坂冬陣眞田丸攻井青地牛助の事

大坂冬陣十二月四日、微妙公御先手篠山を取り、眞田丸へ附く。其朝霧深く、夜明ても一步先も不見、城中には敵多附たりと覺ゆるとて、左衛門佐はいまだ寢て居たるを起しぬ。左衛門佐堀うらを廻り、敵夥敷附たりとおもふ。同勢のつかぬ様に三十間先を打拂へ。城下へ附たる者は、何とすとも登する事にはなきとて、さま一つに鐵炮六挺づつ申付爲打。如案霧晴て見れば同勢は打切て、から堀の内に多くひれ伏して居る。指下して打ければ、振能く退くもあり、多くは打殺さる。此時神尾圖書父子、其振見事也。城中へ首八十三級取て、戸板にすゑ本丸へ遣之。城中には鐵炮に當り一人死す。夏陣五月六日平野にて、渡邊内藏助人數疲れ候由にて眞田と入代る。敵は大和衆也。内藏助と左衛門佐と入代るを見て突てかゝる。左衛門佐突立て追返す。其時眞田手へ首六つ取之。一番吉野勘兵衛、二番絹川彌左衛門、三番塩谷掃部、四番青地牛助、五番西村喜左衛門、六番金安松右衛門、以上六人首六取り、何も將棄の駒を左衛門佐賜之。其夜

登城し候處、各金子五枚宛拜領すと、右の青地牛助話。牛助後には勘左衛門と稱し、横山大膳與力にて百五十石取。後御暇申て他國すれども人品不宜不有附、又御國へ歸り、其子後原織部に奉公し、勘左衛門は浪人にて病死す。



左衛門佐名乗幸村と云此名乗不審。又按、左衛門尉大坂へ入時分名乗信賀と云。

私曰。牛助本姓は奥村氏、父も牛助と云。蒲生氏の臣にて千五百石を領しぬ。青地駿河守茂綱は蒲生本家に付、奥村牛助を乞請て三千石を興へ、姓青地氏を授けぬ。自是奥村を改て青地を稱す。其子牛助、眞田左衛門佐に事へて三百石領す。本藩へ來て横山家の與力と成り、勘左衛門と云。
一、瑞龍公、秀頼公への御答

大坂冬陣の時、織田左門上後稱。北國への御使として、慶長十八年越前今庄より賀州小松迄一日に歩みて來る。家來一人也。小松にて前田對馬家來櫻井掃部は、其家の家來筋に付、掃部所に一宿し、金澤・高岡の様子閉合、翌日高岡に至り瑞龍公へ對面す。秀頼公の御狀には、關東の体近年の内に秀頼を潰し可申仕形也。偏に利長公を頼思召との儀也。御答には、私儀貴殿御覽の通り病中にて、家内さへ不行歩の体也。罷登り御馳走の儀難成御座候。筑前儀は父子の間ながら、今は將軍の婿に候得ば、如何様の存念に候哉不存候。然れば只今私御請は何とも難申上候。但隠居の人数は、何時にても差上可申との御返答のよし。

一、寛永八年の金澤城火災

寛永八年四月十四日金澤城火災、是は河原町より失火して也。本丸へ火移る時、微妙公・陽廣公先高公御同道にて本丸の唐門石壇を御出の頃、御父子御辭譲ありて御出難被成、火は頻りに燒來り、御供中息をのむ。今枝民部すゝみ出で、筑前様には御年若被成御座候。只殿様御出被遊候様にと申す。公にはいや只筑前被出候へと御意也。奥村河内守いや〜

筑前様は御若く御座候。殿様御出可然とてすゝみ出で、公の御手を引て出し奉る。公莞爾と御笑被成、御退出被成候。
佐々左衛門

一、此時或ものへ公被仰付、鐵炮の藥藏は如何、見て參れとあり。畏て走行き、薪丸より車橋への坂を下る時、加藤圖書・津田勘兵衛其外四五人同道し、扱も残念なりと云來る。彼人兩人へ御藥藏は如何と云ふ。随分と防ぎぬれども何ともならず、不及是非と云ふ。彼人少しもはやく申上度おもひ走歸り、御藥藏へは火移候と申す。御供中も興を醒す。其所へ又或もの走來り、御藥藏は御別條無御座候と云ふ。前の人其方は何を申上るぞ。只今津田勘兵衛・加藤圖書藥藏へは火移るといふうへはと云ふ。其者勘兵衛・圖書は御藥藏の事は不可知。我等只今迄御藥藏に附て居、直に罷越候。少しも御氣遣有間敷と云ふ。扱加藤・津田は堂形の御米倉に附居り、米倉に火移る故に車橋を渡り御城へ行く、其路にて行違ふ。然れば間違に極る。其後終に彼人御前不好。御氣入

一、高德公、秀吉公と松任にて御對顔
天正十三年越中陣の時、秀吉公御下向に付、高德公松任迄